

『The Gist of Japan』 (1)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回までみてきた D.C. グリーンの論文は外国人による天理教研究の最初期の文献であるが、この論文が発表された 19 世紀末ごろには、このほかにも日本でキリスト教伝道に従事する宣教師によって書かれた日本や日本の宗教についての出版物が多数発行されている。今回はそのようななかから、グリーンの論文発表から 2 年後の 1897 年に出版された Rufus Benton Peery (ラファス・ベントン・ピーリー) 著『The Gist of Japan: The Islands, Their People, and Missions』(日本の要点: その島々、人々、伝道) を取り上げてみたい。この書籍は、アメリカの Fleming H. Revell Company によって出版された。日本の宗教事情を紹介するなかで、天理教についてもそれなりの紙面を割いて紹介しているのが一つの特徴として挙げられる。当時の欧米で発行されていた新聞や雑誌でこの書籍の紹介が散見され、欧米社会でより多くの人々の目に留まった可能性もある。

著者のピーリーは、アメリカ合衆国のルーテル派の宣教師であり、1892 年に来日し、1903 年に帰国するまでの 11 年間で、主に佐賀県や熊本県などで宣教活動に従事している。略歴は、以下の通り。

1868 年 4 月 8 日 ヴァージニア州パークス・ガーデンに生まれる

1892 年 ゲティスバーグ神学校卒業

1892 年 11 月 23 日 来日、先に赴任していたジェームス・シェーラーと東京で合流。

1893 年 1 月 シェーラーが宣教地と定めた佐賀へ赴任。

同年 3 月 遅れてピーリーが佐賀へ到着、伝道開始。のちに小城、久留米、熊本へと展開。

1897 年 『The Gist of Japan』を佐賀で執筆、アメリカで出版(アメリカ、イギリス、そして日本で広く読まれた)

1903 年 アメリカに帰国(日本滞在期間 11 年間)

帰国後はペンシルベニア州、コロラド州、イリノイ州、オハイオ州、ノースカロライナ州などで牧師と大学の教師を務める。

ピーリーは、この書籍執筆の経緯について、日本という国またその人々について多くの出版物が英語で発行されているが、日本でのキリスト教の宣教活動について詳しく書かれてものはまだ多いとは言えない状況であり、日本の一般民衆の様子を描き、今後の宣教活動に資することを旨とした旨を、序文で述べている。この書籍は 320 ページほどあり、その目次は以下のとおりである。

I. The Land of Japan (日本の国土)

II. A Brief History of the Japanese People (日本人略史)

III. Japanese Characteristics (日本の特色)

IV. Manners and Customs (礼儀と習慣)

V. Japanese Civilization (日本の文明)

VI. Japanese Morality (日本の倫理)

VII. Religions of Japan (日本の宗教)

VIII. First Introduction of Christianity (基督宣教初期)

IX. Modern Roman and Greek Missions (現代のカトリックと正教の宣教)

X. A Brief History of Protestant Missions in Japan (日本でのプロテスタント宣教略史)

XI. Qualifications for Mission Work in Japan (日本での宣教活動のための資格)

XII. Private Life of the Missionary (宣教師の私生活)

XIII. Methods of Work (宣教活動の方法)

XIV. Hindrances (障害)

XV. Special Problems (特別な問題)

XVI. The Outlook (展望)

大枠でとらえると、VII. Religions of Japan (日本の宗教) までが、日本の紹介となっており、書籍の半分弱を占めている。VIII. First Introduction Of Christianity (基督教宣教初期) からが、日本におけるキリスト教の宣教の歴史と現状について書かれており、まさにピーリーの執筆の目的の部分にあたる。

日本の宗教事情について書かれているのが、VII. Religions of Japan (日本の宗教) である。ピーリーは、「日本にはすでに確立した 4 つの宗教があり、それは神道、仏教、儒教、そして天理教である」と書いて、この章を始めている。

まず、はじめに日本人は生来信心深い人々であるとして、「古代においては、迷信や神話的な考えが複合的にひとつに合わさって、宗教としての働きを担っていた。呪物崇拜、男根主義、精霊信仰、木々や蛇への信仰は非常に一般的であった。創造者と被造物の区別は明確ではなく、神々と人間は混ざり合っていて、別々には考えられていなかった。」と説明している。しかし、日本古来の信仰について探求することは本書の目的ではないので、神話的な宗教形態について述べることはせずに、あくまでも現代日本の宗教について簡単に説明したいと述べ、次のように話を進めている。

日本の現代宗教は、神道、仏教、儒教、そして天理教の 4 つである。神道と天理教は土着のものであり、仏教と儒教は中国や朝鮮から入ってきたものである。天理教が始まったのは最近であり、他の宗教ほどの影響力をもっておらず、また地位も確立されていない。神道、仏教、儒教は、何世紀にもわたり、この地で共存してきた。これらの間にはさほど大きな対立はなく、それはキリスト教と民族宗教の関係と同様である。多くの人々は、同時にこの 3 つの宗教の信者であり、彼らは神学を神道から、救済論と終末論を仏教から、道徳や経済観念を儒教から、それぞれ得ている。そのため、これら 3 つの宗教を信じ、社に向かって拝むことに矛盾は感じられていない。実際、これらの 3 つの信仰は非常に混ざり合っているため、各信仰の考えと実践は、その他へと浸透しており、それぞれの純粋な教えを見分けることは困難である。人々の頭の中では、これらは細かく分けられていない。しかし、その起源、歴史、そして教えに関しては、それぞれに違いがあり、独自の信仰となっている。

[参考文献]

R.B. Peery 『Lutherans in Japan』 Lutheran Publication Board of the United Synod, 1900. 青山四郎訳『ピーリーの日本伝道開始の記録』グロリア出版、1982。